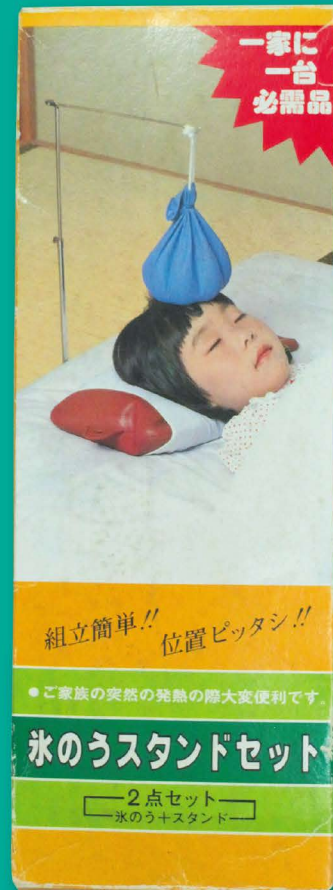


ARCADIA

81

WINTER 2020

Okazaki City Museum News



OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館
[マインドスケープ・ミュージアム]

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]

眼の極楽③ 花と鳥のかたち

館長 榊原 悟

鳥と虫の所縁(下)

注目すべき作がある。「筆耕園」と題された絵鑑で、中国の著名画家の筆様を伝えるべく、彼らの作品の、おそらく得意とする主題の形態だけを写したものと(福岡市美術館蔵 黒田家伝来)。福岡藩の御用絵師狩野昌運(一六三七―一七〇二)の手にかかる。黒田家にはかつて同名の唐絵手鑑が伝来したので(現東京国立博物館蔵)、これと区別するため「百流之絵鑑」と呼ぶ。全二帖、一〇二図よりなる。

問題としたいのは、この一図だ(図1)。林檎の枝に留まる、あの尉鶉である。視線の先には確かに蛇が飛ぶ。画中に「王若水」とあることから、その筆様に倣った作というのだ。王若水は云うまでもなく元代杭州の人。花鳥画を得意としたと伝えられる。「百流之絵鑑」には、馬遠や李唐、毛益、柏子庭など宋元大家の、それらしき古画の写しが収められているから、王若水のこうした団扇画が伝来していたのだろう。枯れ枝と林檎のそれ、尉鶉の留まる枝は異なるものの宗蒼が出光本を描く際に、直接その王若水画を見る機会があったか否か明らでないが、こうした舶載された宋元名画を粉本(手本)としたことは間違いない。となると信春自身にも、それを見る機会があったのではないかと疑いが出るかも知れない。だが能登は七尾の田舎から上洛して間もない、若き日の信春に偶然そうしたチャンスが訪れたとするよりも、ここはやはり紹祥に入門した信春が、曾我一門内に蓄えられた粉本を通じて、その図像情報を得たとみるのが、むしろ自然で合理的ではないだろうか。「百流之絵鑑」の王若水画は、宗蒼画から信春画への鳥と虫の所縁の、そもそも図像的淵源が宋元名画にあったことを物語ってくれているのだろう。それならば蛇という、王朝以来の伝統的美意識が捉えるはずもない虫が描かれたこと



図1: 「林檎に常鶉図」 狩野昌運筆 「百流之絵鑑」のうち

にも得心がいく。

だがそれだけではない。先に「花鳥図屏風」に虫が全く描かれていないと指摘した。その舌の根の乾かぬうちに、と批判されそうだが、実のところ虫が登場する「花鳥図」は無いようにみえて、後述するように丹念に見ていくと他にも少なからず作例が伝わる。そこには、さらに多くの虫や小動物が登場し、当然、それらに対応する新たな図像情報があったはずだろう。

いや、種類が単に多種に及ぶだけでない。描かれた姿かたちそのものが、同時代の花鳥図に登場するそれはもとより、わたしたちの先祖が見、そして歌に詠んだものとは決定的に異なる。つまり室町時代後期、「花鳥の変」同様、虫を見つめる眼にも大きな転換が起きていたのである。「虫の変」である。

ではその転換とは、どのようなもので、またそこに描かれた虫は何で、どんなかたちであったのだろうか。さらにそれらもう一つの図像情報を何から得ていたのか。

それらの問題を質す上で絶好の作があった。バージニア州立美術館本『花鳥草虫図押絵貼屏風』六曲一双こそが、それである(各図六六・一×三五・九センチ図2)。既に一度その名を上げた屏風だ。現状では絵の具の剥落と褪色が著しく痛々しいが、本来は宝石箱をひっくり返したかのように色彩が輝き、目を見張るばかりであったに違いない。押絵貼の小画面も、虫や小動物を描くのいかに相応しい。筆者を土佐光信(生没年未詳)と伝える。光信筆との確証はないが、土佐派系絵師の手になるとみることと衆目一致する。もとは各図上部に五山の詩僧たちの賛詩が、桃山時代の禅僧らによって書写され貼付されていたと云うが、それら十二首の詩が、本来この屏風に貼られていたのか、また十二首の詩がもともと一具のものであるかについても疑問があるらしい(島尾新「伝土佐光信筆 花鳥草虫図押絵貼屏風」『国華』一二〇号 一九九五年)。しかし、そうした五山僧の詩文によって知ることができる、室町時代「草虫画」の流行を裏付ける作品として(河合正朝「室町時代大和絵の花鳥図」『河合正朝絵画史論集』上巻所収 花鳥画の世界第二巻『水墨の花と鳥―室町の花鳥』初出 一九八二年 学習研究社)、その価値はきわめて大きい。「虫の変」の実際を知る上で、これに勝る作品はない。

もとより、わたしたちが注目すべきは、そこに写された虫と小動物、草花の種類だ。いまそれらを列記してみると、次の通り。

右隻

第一扇
松・椿・水仙・薔薇・蒲公英
四十雀・脚長蜂

第二扇
梔子・羊歯・土筆
鼯(日本鼯)・雀

第三扇
枇杷・芥子・華鬘草・胡蝶花
蜥蜴・花蜂(花虻)

第四扇
石榴・燕子花・立葵
常鷄・蝶・花虻・揚羽蝶・竈馬

第五扇
栗
猿(日本猿)

第六扇
茶(山茶花)
猫

左隻

第一扇
梅・竹・イワナシ・枯薄
頭高・尺取虫

第二扇
葦・蓮・浮菴
翡翠・蜻蛉・蛙・目高・鮎・蟹

第三扇
瓜・南瓜
鼻長栗鼠・飛蝗・蟻

第四扇
柿・南天・秋明菊・龍胆
懸巢

第五扇
栗・鳳仙花・笹・稻・車前草・不明花木
鶉・野鷄

第六扇
葦
鷹・鴨

同定に当っては『水墨の花と鳥 室町の花鳥』花鳥画の世界第二卷
(学習研究社一九八二年) 収載「植物・動物名一覽」を参照した。



图2：『花鳥草虫図押絵貼屏風』六曲一双(右隻)



图2：『花鳥草虫図押絵貼屏風』六曲一双(左隻)

気付いて欲しいのは、「倭」に係わるモチーフが無いことだ。花では柳、桜、藤、紅葉などの花木や卯花、撫子、萩などの草花、鳥では鶯、雉子、郭公、鶴など。「定家詠月次花鳥和歌」以来、月づきを象徴するものと位置付けられた花鳥が、ここにはない。となるとバージニア本に登場するこれらの花と鳥は、そうした「倭」の美意識とは異なった眼が関心を寄せ、選んだ、と云う他ない。

そのことを痛感せしめるモチーフもあった。虫や小動物である。その虫について、既にわたしたちの先祖が、秋に鳴く虫や螢、蟬など、ごく限られた虫たちに強く反応してきた事実を述べたはずだ。そうした虫たちが、鳥の場合と同じくほとんど取上げられていないのである。ここでも同様の事情が働いていたわけである。しかも描かれたものは多種に及ぶ。蜂や虻、そして何と尺取虫に飛蝗、竈馬、さらに蜥蜴、栗鼠、鼬に至っては、王朝人はおそらくまともに見ることもなかったに違いない。むろん雅（倭）の世界とは無縁の存在で、歌に詠まれるはずもない。

問題は、描かれたその姿だ。自然の中で生きる姿と云えば体がいいが、要するに喰うものと喰われるもの、捕食のかたちに描かれたとみてよいだろう。四雀や頭高、蜥蜴が見つめる先には、蜂や虻が飛び、尺取虫が屈伸する。いずれも餌である。次の瞬間捕食される運命だ。信春の京博本三幅対に描かれた虻と常鶴の関係も、まさにこれであったことを思い出して欲しい。また円な瞳の可愛さについ絆されてしまいそうだが、瓜を喰い散らす鼻長栗鼠も、次には飛蝗を襲う。自然界の掟である。

衝撃的なのは鼬だ。一羽の雀をまさしく喰えている。雀は逃れようと必死ではばたく。梔子の枝にはもう一羽。鼬を威嚇するかのよう甲高い声を上げ、はばたく。二羽は番だろう。その一羽がいま捕食された。そんな厳しくも残酷で生々しい光景が展開する。

だが、残酷と思うのはわたしたちに過ぎず、自然界ではむしろこれこそが日常であり、生きるための営みであった。しかし王朝以来、わたしたちの先祖が、こうした虫や小動物の営みに眼を向けることはなかったし、ましてやその営みを歌に詠み、絵に描くことなどあるはずもない。いや、わずかに遣る虫を含む作品にも、ここまで生々しい描写はない。だがバージニア本には確かにそれが描かれていた。それも印象深く。

となると此本制作に当たっては、こうした描写を可能にさせた外的要因Ⅱ図像情報があったとみるべきだろう。しかも描かれたものの中には当時の日本では見ることさえできないものがあった。瓜を喰い散らす鼻長栗鼠とその左方の南瓜とである。前者は棲息地を東南アジアとするし、後者も中米原産で、後に狩野探幽（一六〇二〜一七四）の『草木花写生図巻』（東京国立博物館蔵）に長崎方面での方言「ぼうぶら」として写されていることから（図3）、日本への渡来は近世初期（十六世紀）のこととみられるからである（『狩野探幽 草木花写生図巻』北村四郎氏の植物同定と解説 紫紅社 一九七七年）。いずれもバージニア本の絵師が見るよしもない。となれば、それを描くことを可能にさせた図像情報があったことは疑いない。それを探ることは、信春三幅対本に至る、もう一つの鳥と虫の所縁を知ることになるはずだし、そこに写された虻とこれを狙う常鶴の緊張感ある表現が、信春の優れた画才だけで説明しきれないことも教えてくれるだろう。



図3：「南瓜図」 狩野探幽筆 『草木花写生図巻』 雑の部Ⅱのうち

● 会期：2020年1月25日(土)～3月22日(日) ●

暮らしの うつりかわり

伊藤 久美子

働き終えた道具たちの年に一度の晴れ舞台（暮らしのうつりかわり）の季節がやってまいりました。平成二十四年度に始まり、今回で八回目を迎えます。

美術博物館収蔵品のなかで、ガラクタダの粗大ゴミだのと揶揄され、何かと肩身の狭い思いをしているモノたちです。しかし、これだつて寄贈していただいた皆さまによって築き上げられた大切な岡崎の文化遺産なのです。

会場には明治、大正から昭和四〇年代頃までのいろいろな道具を集めました。一家団欒の象徴でもあった昭和三〇年代の茶の間を再現し、暮



昭和30年代茶の間風景再現（平成30年度展覧会の様子）

らしを支えた衣食住にまつわる道具のほか、むかしの学校の教科書や道具、思い出の品々、雛人形などを小テーマに分けて紹介していきます。ひとつひとつの道具には、それを持つていた方や使っていた方の生活や人生、思いがあり、それぞれに歴史的な背景や価値を持っています。

今回はこの展覧会がきっかけとなり、あらたに寄贈いただいた品々もたくさんご紹介し、ささやかながら美術博物館から寄贈者の皆さまへ感謝の気持ちをあらわしたいと思えます。

なお、本展は公立小学校三年生の社会科「古い道具と昔のくらし」へ

関連 イベント

◆子どもわくわく！教室（小学生対象）

ワークシートをやりながら、むかしの暮らしや道具について調べてみましょう！学芸員の楽しいお話も聞けるよ。ホンモノの道具にもさわられるよ！（ワークシートは会期中どなたでもチャレンジできます。）
2月1日(土)・8日(土)・16日(日)・22日(土)、3月1日(日)
各日とも午前10時30分から正午

◆展示説明会

むかしの道具の見どころなどを学芸員がお話します。あなたの暮らしの思い出も語ってください。
2月16日(日)、3月8日(日) 各日とも午後2時から

いずれも
当日自由参加
(当日の観覧チケットが必要)
参加費無料

の学習支援を兼ねた展覧会です。平日には学校の団体見学があり、にぎやかな会場となります。

展示を見ながら、むかしと今の生活の違いや変化、道具に託されたむかしの人々の生活の知恵をくみ取ってください。同時に私たちの今の暮らしや社会をとらえ直し、新しい「令和」の時代に私たちは何を残せるのか、ふと考え直す場面にしていただけると幸いです。

YAGURA Presents 2月15日(土)

1 **ムービー&トークショー**
「暮らしの道具」松野屋代表 松野 弘氏による
荒物雑貨の作り手たちの背景
時間／午前11時～正午
場所／当館1階セミナールーム

2 **ワークショップ**
ぞうきんチクチク
講師／松野屋 松野きぬ子氏
時間／午後1時～3時
場所／当館地階作業スペース
定員／10名

事前
申込制

展覧会会期中に「松野屋のあらもの市」開催

詳細はミュージアムショップYAGURAへ TEL 0564-83-5952

愛知県内の博物館・資料館などをめぐる ひなまつりスタンプラリー
開催期間：2月1日(土)～3月8日(日)

ひなまつり展をめぐってスタンプを集めよう！先着で記念品がもらえます。



‘64東京オリンピックソノシート（昭和39年）

●会期：2019年11月23日(土・祝)～2020年1月13日(月・祝)●

Roots of Kawaii
内藤ルネ展
～夢見ること、それが私の人生～

酒井 明日香

十一月二十三日(土・祝)から始まった内藤ルネ展も、早いもので閉幕を迎えようとしています。おかげさまで多くの方にご観覧いただきまして、草葉の陰でルネも喜んでくれているといいなと思っています。

本展では故郷・岡崎での展覧会ということで特別に、小学校の同級生をはじめ生前ルネとゆかりのあった方々からお預かりした品々を、「岡崎ゆかりの品」コーナーにてご紹介いたしました。資料をお借りした際にはエピソード等もお聞きしたのですが、どの方も嬉しそうにルネとの思い出をお話しされてきた姿がとても印象的でした。きっと、心優しく人との出会いを大切にしていたルネの人柄の賜物なのだろうと感じました。

同時に、色褪せないルネの作品の魅力もあらためて実感しました。

展覧会の広報にあたり、ポスター・チラシの設置やメディアへの掲載を各所にご依頼していたのですが、お送りしたチラシが早々になくなったとの声や、新規のメディアからも情報掲載のご提案をいただくことがありました。また、割引券もいつもの展覧会に比べてかなり多く用意しましたが、多数の方にお手に取っていただいた結果、展覧会開会前には当館の在庫がほぼなくなっていました(入手できなかった方はごめんなさい)。広報に御協力いただいた各所のお力添えはもちろんですが、時を超えてきらめくルネの作品の輝きを目の当たりにしました。

展覧会をご覧いただいた皆様の心の中には、どんな思い出がありますでしょうか。いつでも夢のようなショットを与え続けたいと願ったルネですが、本展でもそんなショットを受けていただけただなら幸いです。



インタビューの様子

博物館実習

板谷 寿美

八月二十日(火)から二十四日(土)までの五日間、当館で博物館実習が行われました。今年は愛知県内の七大学から七名の大学生が実習に参加しました。「博物館実習」とは学芸員資格を取るために必要な授業のひとつです。私も数年前、とある考古資料館で博物館実習を受けたことがとても懐かしく思い出されます。当館は美術と歴史、両方の分野の資料を収蔵しているため、美術に興味のある学生も、歴史に興味のある学生も実習に参加します。実習内容も多岐にわたります。今年は資料の取り扱いはもちろんのこと、展覧会の企画・広報などについても考えてもらいました。

特に実習生によるギャラリートークは当館初の試みでした。実習中に開催されていた企画展「キスリングーエコール・ド・パリの煌き」の中から好きな作品を一つ選び、実習最終日にギャラリートークを実施しました。美術を専門とする学生ばかりではない中、書籍で調べたり、担当学芸員に質問したり、本物の絵をじっくりと

見たりしている姿が印象的でした。本物の作品の前で話してもらおう、ひとつの経験となったと思います。普段、話す側である学芸員も、学生たちの姿をみて学ぶところがありませんでした。この五日間が実習生にとって次のステージでの糧になればうれしく思います。



ギャラリートークの様子▲



▲広報について考え中

◀資料取扱い実習

展覧会報告

Special Exhibition

特別 企画展

●会期：2019年7月27日(土)～9月16日(月・祝)●

キスリング エコール・ド・パリの煌き

高見 翔子

特別企画展「キスリングーエコール・ド・パリの煌き」(七月二十七日～九月十六日開催)では、二〇世紀初頭のエコール・ド・パリを代表する画家キスリング(Kisling, 一八九一―一九五三)の画業とその変遷を紹介しました。キスリングの回顧展として、日本で十二年ぶりの開催となった本展。会場では、キスリングの独特で鮮やかな色彩をお楽しみいただけるよう、画家の作品に着想を得たグリーンの色を展示空間の各所に施し、華やかな作品を引き立たせよう工夫をしました。

また関連イベントでは、講演会、コンサート、ギャラリートークを開催しました。とりわけ、講演会とコンサートは、満員御礼、多くの方々にご参加いただきました。講演会で



展示風景



会場入口風景

は、キスリングの生涯と画業について、丁寧に解説いただきました。特に、彼がユダヤのルーツについてどのように考え、向き合っていたのか、というお話が興味深かったです。コンサートでは、キスリングと同じく二〇世紀初頭から一九二〇年代にかけてパリで活躍した作曲家たちとその音楽について、解説とともに音楽を愉しむことができました。

一九二〇年代、パリで時代の寵児となったキスリングの作品は、真夏の太陽にも勝る輝きで人々を魅了したと思います。ご来場、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

展覧会報告

Exhibition
企画展

●会期：2019年9月28日(土)～11月10日(日)●

鶴田卓池と三河の俳諧 蕉風俳諧の系譜

板谷 寿美

九月末に始まった「鶴田卓池と三河の俳諧―蕉風俳諧の系譜」展が、十一月十日に閉幕しました。「鶴田卓池」はもう覚えてくださいましたね。俳句界を代表する四人(天保四老人)のうちの一人で、卓池以外の三人は政治や文化の中心地である京や江戸に出ていった一方、卓池はあくまで岡崎を中心に活躍しました。長く岡崎市内に住んでいる方でも「こんな人がいたなんて知らなかった」との声が多くありました。一方、展覧会開催中、特に三河地域の各所から「うちにも卓池の作品があるよ」というお声がけもいただき、多くの作品を目にする機会を得ました。卓池は作品を求められると快く描いていたそうです。お声がけをいただくと、作品が地域の方に大



ワークショップの様子



展示風景

切に守られてきていることを実感しました。展覧会関連イベントとしては講演会や子ども向けワークショップ、バスツアーが開催されました。また十月十九・二十日には、造形おかざきっ子展が当館近辺で実施されました。

ご協賛いただきました岡崎信用金庫様、鶴田家のご子孫をはじめ展覧会の開催にあたりご協力くださった皆様に改めて御礼申し上げます。

ただいま準備中!

Exhibition
企画展

● 会期：2020年4月4日(土)～5月17日(日) ●

西洋近代美術にみる 神話の世界

高見 翔子



ウィリアム・アドルフ・ブーグロー 《音楽》1855-56年頃
国立西洋美術館蔵

田園や森に戯れる神々や半神たち、そしてその庇護を受ける人間たちが恋や冒険を繰り広げるギリシャ・ローマ神話は、時代を経るごとに多様な解釈や創作が加えられ、豊かな広がりを見せてきました。美術においても同様に、ルネサンス以降、古典を教養としていた宮廷人や君主たちに愛されて宮殿や邸宅を飾る美術品の主題として人気を誇りました。本展では、18世紀末から20世紀半ばにかけての作家を取り上げ、ギリシャ・ローマ神話や古典古代の主題を扱った作品をご紹介します。

本多家シンポジウム開催!

明和6年(1769)、本多家が岡崎藩主に襲任しました。それから250年となることを記念して、徳川四天王本多家とその家臣団にスポットを当てたシンポジウムを開催します。

日時：令和2年2月16日(日) 午後1時～5時(午後0時30分開場)
場所：岡崎信用金庫本店2階大ホール
定員：200名(事前申込み不要、当日先着順)

基調講演 小宮山敏和氏(国立公文書館)「徳川四天王と家臣たち」
報告① 水野伍貴氏(株式会社歴史と文化の研究所)「関ヶ原合戦における本多家」
報告② 石神教親氏(桑名市役所ブランド推進課)「桑名時代の本多家」
報告③ 湯谷翔悟(岡崎市美術博物館)「本多家の家臣団」
パネルディスカッション 司会：堀江登志実(岡崎市美術博物館)



《本多忠勝像》岡崎市美術博物館蔵

編集
後記

あけましておめでとうございます。年号が平成から令和へと変わった今年度、最後を飾る展覧会は収蔵品展「暮らしのうつりかわり」です。今年は、東京オリンピックというビッグイベントを控えています。が、「暮らしのうつりかわり」展でも、昭和39年開催の東京オリンピックに関連した懐かしの資料が出品されます。その他にも、明治・大正・昭和を振り返り、あるいは新たに知ることができる道具たちが大集合しますので、賑やかな展示室をぜひお楽しみください!(高見)

表紙図版：商品パッケージ《水枕》《水のうスタンドセット》



岡崎市美術博物館
【マインドスケープ・ミュージアム】

開館時間：午前10時～午後5時
(入場は午後4時30分まで)
休館日：毎週月曜日
(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第81号 2020年1月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1-1 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)

ARCADIA